

◇その日、私は京都にいました。ごぶさたしていた本山・妙心寺で、出席しなければならぬ会合があったのです。「その日」、なんて気づいた言い方をせず、簡潔に書けば平成三十年七月二三日です。会合は午後からだったけれど、朝早く熊谷を出発してお昼前に「松栄堂」というお香屋へ行きました。進物用の線香を買ったためです。わざわざ本店まで行かずとも、東京にも支店があるし、熊谷の「カノヤ」でも松栄堂の品物は買えます。今どきはネットでも買えます。なぜ、本店まで行くのか。進物用の場合、本店では粋な水引の包みと丁寧な表書きをしてくれるから。「新盆見舞い」にいくつかの線香を買って店を出ました。京都の街を東西に貫く御池通りを、バス停まで歩きます。その日、熊谷は41.1度の最高気温を記録しています。京都も暑いけれど、風が心地よい。道幅が五十メートルはある御池通りの両側にはケヤキの大き木が植えられています。ケヤキは歩く者に日陰と緑風をプレゼントしてくれま

す。世の中のゴミ扱いはされないで、愛でたいだけけるような生き方をしたいですね。(博芳)

### 編集後記

どの歩道に植えられたケヤキの街路樹は毎秋、剪定されて何年たっても枝をのばすことができません。ケヤキは毎年枝をおろすものではないはず。おそろく、落葉掃除が大変だから、落ちる前に葉をとってしまうのでしょうか。あるいは、落ち葉への苦情が寄せられるのか◇さて、これを書いているのは旧年の十二月初旬です。数日前にも京都・妙心寺へ行きました。夏と同じ会合へ出席するためです。市バスに乗って、妙心寺北門でおりました。妙心寺の参道沿いは、松ばかりで紅葉なんかありません。でも、塔頭(たっちゅう)にわき寺に入れば、まっ赤な紅葉が、緑の苔のカーペットの上に落ちています。掃かないでわざと落ちたままにしているのです。幾日も掃かないかというところ、そんなこととは。掃き清められた地表に落ちる葉はきれいでも、数日たつて何層にも重なると汚くなる。汚くなる寸前に掃いて、また綺麗な落ち葉をめぐる。毎日掃除すれば良いというものではないから、難しいけれど落ち葉をゴミとみるか。愛でる対象とするのか。そこには、おおきな心のへだたりがあります。世の中のゴミ扱いはされないで、愛でたいだけけるような生き方をしたいですね。(博芳)

正月らしく、日の出に富士山の画をかかげました。作者は佐藤和喜さんです。和喜さんは私立高校の教諭をつとめながら、画を描いて毎春、東京銀座の丸善書店で個展をひらいています。佐藤さんとの縁は、昭和の最後の頃にさかのぼります。私は新座市にある平林寺という修行道場にいました。年に一度、七月末の五日間だけ、希望すれば一般の人でも修行僧と一緒に坐禅堂で坐ることができました。そのなかに和喜さんもおられたらしい。らしい、と書くのは、私は憶えていないからです。修行者にとっては日常なので、五日間にわたり真正面からお顔を見ていたはずなのに、記憶にないのです。五日間、顔を真つ正面から見ていた、というのはどういうことか。つまり、坐禅堂というのは、左右の両側にわかれて、おたがいに向き合って坐るのです。対面です。対面して坐るのは、現在の臨濟宗の坐り方です。



それに対して禅宗でも曹洞宗は、壁に面して坐ります。面壁(めんぺき)です。もともとは、臨濟宗も壁に向かって坐っていたようです。それが、江戸時代の初期に長崎へやってきた中国は明の禅僧が、対面して坐っていたので、それを取り入れたらしい。これですごいことです。当時の明は先進国です。新しいやり方で良さをそうならば、これまでも自分らが数百年続けてきたこともがらつと変えてしまおう。臨機応変というか。節操がないともいえるけれど。斬新なものに柔軟に変化した四百年前の先輩にびっくりします。そういえば、たかだか三十年前の儀式を先例にして変えることをせず、「聞く耳をもたない」と叱られた方が年の暮れにおられました。聞く耳と心をもった、しなやかな年でありたい。(住職記)

### 連続シリーズ「見つけた」

禅にこんな問答があります。原文は漢文ですが、現代語に超訳してみます。修行僧がお師匠さんに尋ねます。「道とは何ですか」「道か、その垣根の外にあるやないか」「そんなちっぽけな道ではありません。天下の大道を尋ねているんです」「大道か、それならば新幹線が通り、高速道路もあるじゃないか」

## 見つけた!

「大道長安に透る」という禅語の語源になっている問答です。つまり、仏教といっても、禅といっても、特別なものではなくて、日常生活の中にくらでもあるよ。といったところでしょうか。そこで、街頭に禅を探し、現代に仏教を見つけるコーナーをつくりました。

「住」の字には、「とどまる」の読みがあり、「職」の字は、「つとめ」とも読みますから、住職は、寺に「とどまるのがつとめ」の意味です。なんちゃって。居ない時もよくありますから、ご勘弁を。寺にいつもとどまっているわけではないけれど、サラリーマン諸氏より、移動は少ないはずです。だから、未だにスマホを使わずに、ガラパゴス携帯、ガラケーです。今どきの若者は、家にいても外にいても、スマホを二四時間手放せなくなっているから、外出が少ないからスマホは不要というのは、理由にはなりません。



まだまだ続きます。全部を読みたい方は、詩集『椅子かららず』(筑摩書房)をご覧ください。やさしい言葉でつづられた詩ですが、引用した中で最後の二行、「すぐに古びるがらくたは／我が山門に入るを許さず」は説明が必要でしょうか。これには本歌(ほんか)があります。「葷酒(くんしゅ)、山門(さんもん)に入るを許さず(不許葷酒入山門)」という言葉があります。江戸時代に中国から日本へやって来た隠元禪師が、日本の僧が酒を飲む様子を見て驚き、いましめに石に刻み山門前に立てさせた言葉だといえます。

「葷(くん)酒(しゅ)」は、ニラやニンニクのような刺激の強い野菜のこと。酒や刺激のつよいものを食べて臭いやからは、寺の門から中には入ってくるのを禁ずるといった意味でしょうか。現代の禅寺にも、この文句を刻字した石碑がよく建てられています。

そんな住職をばげましてくれる詩を見つけました。詩人の茨木のり子(1926〜2006)の、ズバリ「時代おくれ」という詩です。行数にして三六行、五頁にわたる長い詩の冒頭を紹介します。

車がない／ワープロがない／ビデオデッキがない  
ファックスがない／パソコン インターネット  
見たこともないけれど格別支障もない

そんなに情報集めてどうするの  
そんなに急いで何をするの  
頭はからっぽのまま

すぐに古びるがらくたは  
我が山門に入るを許さず

「不許葷酒入山門」の石碑は松岩寺には今のところありませんので、欲しいな!と想っています。よい書風の「不許葷酒入山門」の字はないかとさがしているところですが、でも、そんなものを建てたら、「酒好きの住職はどうするの」。なんて心配はご無用。「葷は許さず(不許葷)、酒は山門に入れ(酒入山門)」と読んでいるのは西村恵信師です(『禅あるがままに生きる』三笠書房)。あるいは、「酒とニンニク臭いのは、裏門から入ってください」とは、故松原哲明師の駄洒落でしたから。